

「コトダカラ」と「コトダシ」

—原因・理由表現の体系における位置づけ—

蓮沼昭子（創価大学）

hasunuma@soka.ac.jp

1. はじめに

「コトダカラ」「コトダシ」は、形式名詞の「コト」に接続助詞の「カラ」「シ」が結びつき、複合辞化した接続表現である。この二つは類義表現として扱われることがあるが、重要な違いも認められる。本稿の目的は、大規模コーパスの用例を観察することにより、両者の用法の特徴とその異同を明らかにすることである。本稿が扱う「コトダカラ」「コトダシ」とは、次の例の下線部が示すような接続表現のことである。

- (1) 忙しい先生のことだから、突然訪ねていっても簡単には会えないだろう。
- (2) 試験日も近いことだし、夜更かしは控えたほうがいいよ。

「コトダカラ」は「コト」と「カラ」が結びつき複合辞化することにより、「カラ」にはない主節のモダリティ制約を受けることがあるが、それはなぜなのだろうか。「コト」によって付け加わる意味とは、いかなるものなのだろうか。本稿の究極の目標は、異なる接続形式がカバーする意味領域の重なりと棲み分けを観察し、それぞれの特性を把握することにより、日本語の原因・理由文の体系を明らかにすることである。形式名詞「コト」「モノ」「ノ」に「カラ」が結びついた複合辞の「コトダカラ」「モノダカラ」「ノダカラ」は、単独の「カラ」では表せない特化された理由づけの機能が観察される。これらと「カラ」の相違を明らかにできれば、日本語の原因・理由文の体系に対して、いっそうきめ細かな記述・分析が可能になるだろう。「ノダカラ」「モノダカラ」については、蓮沼（2009・2010）で、ある程度その特性を明らかにすることができた。本稿では、「コト」と接続助詞の「カラ」「シ」が結びついた「コトダカラ」「コトダシ」を取り上げ、日本語の原因・理由文の体系におけるこれらの位置づけを試みたいと思う。

2. 先行研究

「コトダカラ」「コトダシ」を扱った先行研究は数えるほどしかない。「コトダカラ」については、市川（2007）、益岡（近刊）、「コトダシ」については、前田（2006b）がある。日本語記述文法研究会編（2008）は、この二つを類義表現としてまとめて説明している。この節では、前田（2009）の原因・理由文の分類を紹介した上で、「コトダカラ」「コトダシ」をめぐる先行研究を概観し、論点の整理を行っておきたい。

2-1 原因・理由文の分類

前田（2009）は、原因・理由表現を前件・後件の表す意味関係により「原因・理由」「判断根拠」「可能条件提示」の3種、後件の取りうるモダリティにより、「事態系」と「判断系」の2種に分け、<表1>のように整理している。主節に一回性過去が現れうるものが「事態系」、それが現れえず、推し量

りや働きかけ・表出が現れるものが「判断系」である。

本稿が研究対象とする「コトダカラ」「コトダシ」は、前田（2009）の表では取り上げられていないので、その位置づけについては、先行研究を検討した後、3節で改めて取り上げることにしたい。

<表1>原因・理由文の分類（前田 2009）

	述べ立て		働きかけ	表出	
	一回性過去	推し量り・当為			
から・ので	○	○	○	○	
ために せいで おかげで もので ものだから	○	×	×	×	事 態 系
ばかりに だけに	○	×	×	×	
からには 以上 からこそ のだから	×	○	○	○	判 断 系

2-2 市川（2007）

市川（2007）は、「X（の）ことだからY」は、話し手と聞き手が共通にもっている類推的な判断を表すとし、Xには人を表す名詞、Yには「～だろう／かもしれない／はずだ／にちがいない」など、推量判断の文が来ることが多いとしている。(3)がそうした例である。

(3) ワンマン社長のことだから、今度のことも独断で決めてしまおうだろう。

2-3 益岡（近刊）

益岡（近刊）は、「コトダカラ」が名詞を受けイディオム性をもつ構文である「Nノコトダカラ構文」の特徴を考察したものである。「Nノコトダカラ構文」についての益岡の説明を整理すれば、以下のようになる。

- i) Nについて、その属性を根拠に帰結として推論できる事態を述べる。
- ii) 「Nのこと」は、「N+の+こと」のような内部構成をもち、「Nが所有する属性」という構成的意味を表す。
- iii) 「もの」が事物を表すのに対し、「こと」は事態を表す。「事象」（出来事）と同様、「属性」も事態であり、「こと」に含まれる。
- iv) 《対象Nの属性PからNが関わる事態Sが推論される》ことを表す構文であり、変項 [N, P, S] が関与し、構文全体が定まったパターンをもつ「構文イディオム」である。
- v) Nは複文全体の同一の主題を表す。Nには主として話し手にとってなじみ深い存在である人物

が来る。

- vi) 判断の根拠（推論の根拠）を表す「Nノコトダカラ構文」では、「から」に固定され「ので」は用いられない。

2-4 前田（2006b）

前田（2006b）は原因・理由の暗示的累加を表す複合辞の「こともあって・ことだし」を取り上げた研究である。ここでは、「ことだし」についての前田の説明を整理しておく。

- i) 「ことだ」に接続辞「し」が続くもので、「し」自体が並列および理由を表すので、そこから原因・理由の累加の意味が生じる。
- ii) 文中に「も」が出現することが多い。
- iii) 多くが動詞に接続し、名詞に続く例は見られない。
- iv) 主節には、事実の述べ立て、疑問表現、意志、話者の判断・主張の表現が現れる。
- v) 「既に知られている事態を理由として取り上げる」という性質である既定命題性をもつ。これにより、「～だから、当然そうした・そうすべきだ・そうなるはずだ・仕方がない」というニュアンスが出る。
- vi) 「こと」は、「理由・事情・状況」などを表し「そうした状況のもとで」という意味で原因・理由を表す。そのため、婉曲的で、状況を説明するような場合に用いられる。話し手は当該事態が原因・理由であることを強く主張せず、遠回しに原因であることを示し、婉曲的な原因・理由の提示を行う。
- vii) 「ことだし」の「こと」は削除可能であるが、「こと」の介在により、上記vi)の意味や、場合によっては責任回避、あるいは一般論として述べるという態度が表される。

2-5 日本語記述文法研究会編（2008）

日本語記述文法研究会編（2008）は、「ことだから」「ことだし」を類義的な原因・理由表現として一つにまとめて記述している。すなわち、「ことだから」「ことだし」は、話し手の判断や行為要求の根拠となる事情を表し、主節に述べられる話し手の判断や行為要求などは当然のことだ、妥当なことだという主張をやわらげて表現する形式だとされる。二つの違いは、「ことだから」の方が根拠であることがはっきり示されるのに対し、「ことだし」は、ほかに根拠があることを暗示し、より婉曲的に示すという点に求めている。

2-6 問題点の整理

ここで先行研究の問題点・不十分な点を指摘し、本稿の課題を掲げておく。先行研究については、以下のような疑問点・問題点が指摘できる。

1) 前接する語の品詞の相違による「コトダカラ」「コトダシ」の用法の相違

「Nコトダカラ」は人を表す名詞に接続する人が多いとされる（市川2007、益岡近刊）。一方、「コトダシ」の多くは動詞に接続し、名詞に続く例は見られないとされる（前田2006b）。だとすれば、この二つを類義表現としてひとくくりにして説明する、日本語記述文法研究会編（2008）の扱いは大まか過ぎ、二つの相違について検討が必要である。

2) 前接語の品詞の違いによる「コトダカラ」の用法の区別

「コトダカラ」が名詞に続く場合と名詞以外に続く場合では、用法に違いがあるが、先行研究ではこの点を取り上げられておらず、検証が必要である。

3) 主節のモダリティ制約

「コトダカラ」と「コトダシ」の主節が取りうるモダリティについての検証が十分とはいえ、事例で検証する必要がある。

4) 「コト」が付与する意味

「コトダカラ」「コトダシ」の「コト」は、削除可能な場合があるとされるが、「コト」の介在によって付け加わる意味として「既定命題性」「婉曲的な原因・理由の提示」といったものが挙げられている（前田 2006 b）。一方、益岡（近刊）においては、「Nコトダカラ」の「コト」の意味を、Nの所有する「属性」と捉えている。こうした「コト」の意味と、「コトダカラ」「コトダシ」の用法の関連についても考察を深める必要がある。

以上、先行研究の主要な問題点を指摘し、本稿が取り組むべき課題を掲げた。以上の点を踏まえ、本稿ではコーパスにおける「コトダカラ」「コトダシ」の使用実態を調査し、課題の解明を目指す。具体的な調査の説明と結果の分析は、4節以降で行うが、その前に、上記3)に挙げた「コトダカラ」「コトダシ」と主節のモダリティの共起関係について、予備的考察を行っておきたい。

3. 「コトダカラ」「コトダシ」と主節のモダリティの共起（予備的考察）

蓮沼（2010）では、自然談話における「モノダカラ」を取り上げ、理由形式と主節のモダリティの共起関係を観察した。以下の<表2>は、蓮沼（2010）の表に、「コトダカラ」「コトダシ」を加え、筆者の内省に基づく容認判断の結果を示したものである。

<表2>理由形式と主節のモダリティの共起

	事実の述べ立て	概言系判断	行為要求	意志
モノダカラ	○	?	×	×
ノダカラ	×	○	○	○
Nノコトダカラ	×	○	×	×
コトダカラ（Nノ以外） コトダシ	?	○	○	○
カラ	○	○	○	○

<表2>における「○ × ?」の記号は、主節のモダリティと当該の接続形式の共起がそれぞれ「可能」「不可能」「不可能ではないがやや不自然」ということを表す。それぞれの場合に対応する例を、(4)～(9)に示す。

- (4) 子どもがあまりうるさいものだから、{眠れなかった／?眠れないかもしれない／眠れないのだろう／*注意してください／*注意しよう}。
- (5) 時間がないんだから、{*急ぎました／急いでください／急いだほうがいい／急ごう}。
- (6) あいつのことだから、また寝坊した {*φ／のだろう／のかもかもしれない／にちがいない}。

- (7) 期末試験も終わったことだから、ゆっくり {?休んだ/しているにちがいない/休んでください/休もう}。
- (8) 雨も降っていることだし、早めに {?帰った/帰ってくるだろう/帰りなさい/帰ろう}。
- (9) 雨が降っているから、早めに {帰った/帰ってくるだろう/帰りなさい/帰ろう}。

<表2>を見ると、「モノダカラ」と「ノダカラ・コトダカラ・コトダシ」は、共起する主節のモダリティに関して、相補的分布傾向を示すことが分かる。「モノダカラ」は、基本的に事実の述べ立ての表現とは共起するが、「だろう」「かもしれない」のような概言系判断や、行為要求、意志の表現とは共起しない（しにくい）という点で、「事態系」に属するものである。一方「ノダカラ・コトダカラ・コトダシ」は、事実の述べ立ての表現と共起しない（しにくい）という点で、「判断系」に属すと考えられる。なお、(9) が示すように、形式名詞を伴わない単独の「カラ」は、主節のモダリティに制約を受けず、すべての表現類型と共起する。

「コトダカラ」が用いられた(6)(7)については注記が必要である。(6)のように、人名詞に「コトダカラ」が続くような場合は、概言系判断の表現は自然だが、行為要求や意志の表現の共起は不可能と考えられ、非常に限定された構文でのみ用いられるものである¹。一方、動詞述語を「コトダカラ」が受ける(7)では、行為要求や意志表現の使用も自然である。つまり、「コトダカラ」は、前接する語の品詞的特徴によって、異なる用法をもつと考えられるのである。

(7)(8)における「コトダカラ」「コトダシ」と事実の述べ立ての文との共起可能性については、判断が微妙である。筆者の内省では「不可能ではないがやや不自然」と判断されるため、「?」を付してある。上の例は、いずれも筆者の作例であり、その容認判断も筆者一人の内省に基づいているため、なお検討の余地を残すものだが、ここでは作業仮説として<表2>に示しておく。「コトダカラ」「コトダシ」と主節のモダリティとの共起関係については、コーパスの用例を観察し、5節で改めて検討することにしたい。

4. コーパス調査の概要

「コトダカラ」「コトダシ」の使用実態を知るために、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ(2009年度版)²における用例の調査を行った。コーパスで「ことだから」「ことですから」および「ことだし」「ことですし」の文字列を検索した結果、<表3>に示すような数の用例が抽出された³。

¹ 益岡(近刊)において「Nノコトダカラ」を「構文イディオム」と捉えているのは、こうした特徴に着目してのことである。

² 以後、これを短く「コーパス」と呼ぶ。

³ 本稿では、コーパスに実際に出現した文字列を平仮名表記で示し、その文体的変種を代表する形式として、片仮名表記の「コトダカラ」「コトダシ」を用いる。この二つの文体的変種としては、さらに「ことでございますから」「ことでございますし」があるが、本稿の考察対象から外す。ちなみにコーパスにおける「ことでございますから」「ことでございますし」の出現数は、それぞれ136例、43例あるが、そのほとんどが「国会会議録」の例である。これらを考察対象から外した理由は、国会での発言のため、一つ一つの用例が非常に長く、用法の特定には長い文脈を参照する必要があること、また本稿の対象とする「理由」の用法と認定できる例はあまり多くはないことが見込まれたためである。

<表3>コーパスにおける「コトダカラ」「コトダシ」の出現数

	コトダカラ		コトダシ		
	ことだから	ことですから	ことだし	ことですし	
考察対象とした 用例数	95	27	52	8	182
考察対象から 除外した用例数	325	342	73	46	786
小計	420	369	125	54	
合計	789		179		968

「コト」「コトダ」は多様な意味・用法をもち、どのような「コトダカラ」「コトダシ」を考察対象とするかの判断は困難となる場合が多い。本稿では、以下のような基準を立て用法の判定を行い、考察対象の絞り込みを行った⁴。<表3>の上段と下段の数字は、その基準に基づき判定した結果の用例数である。

A 考察対象とした用例

- ① 「Nノコト」がNの属性を表す場合
- ② 「コト」が「状況・事情」といった意味を表し、これらで言い換えが可能な場合

B 考察の対象から除外した用例⁵

- ③ 「コト」の前接部分に「こういう/そういう」「～という/つていう/といった/との」などの指示表現・引用表現が使用されている場合
- ④ 「コト」が「事柄・出来事・意味・経験」といった意味を表し、これらの語で言い換えが可能な場合
- ⑤ 「Nノコト」の「コト」の意味として「属性」「事柄・出来事」「状況」など、複数の解釈が可能で曖昧性がある場合

上の基準の実際の適用について、例を挙げ説明を加えておこう。次の例は、同じ形式をもつが、異なる基準が適用される場合の例である。

- (10) ところが、二人は遊びに熱中して、時間のたつのを忘れてしまった。子供のことだから、

⁴ 考察対象の絞り込みを行うに当たっては、備前(1989)の「～ことだ」の用法分類も参照した。以下の分類は備前の分類を本稿の観点から整理したものである。本稿の「コトダカラ」「コトダシ」の用法が関連をもつと考えられるのは、(II)の「e 理由・根拠」の用法であるが、その他の用法は直接の関連性をもたない用法である。

(I) 「ことだ」が名詞述語文を形成する場合

- ① 「XはYである/することだ」(Xが名詞相当で「こと」が動詞や形容詞述語Yを名詞化し、それに「だ」が続く場合)
- ② 「Yである/することはXだ」(上記の文が分裂文の形をとる場合)

(II) 「ことだ」全体がひとかたまりでa～hのような意味・機能をもつモダリティ表現を形成している場合

- a 当為 b 命令禁止 c 感嘆・感動 d 伝聞 e 理由・根拠 f 言い換え・要約 g 推量・推定
- h 女性語的な終助詞

⁵ Bの基準については適用の順序を設け、③を適用後に④を適用する形で用例の絞り込みを行っているが、これには問題がある。③で除外した例の中に、A②に当てはまる用例が含まれている可能性があるからである。B③に当てはまる例は、用法の判定に比較的長い前文脈を参照する必要がある例が多く、用法の判定が困難なことから便宜的にとった措置である。B③の基準で除外した例の数は、「コトダカラ」「コトダシ」で、それぞれ230例、11例ある。除外した例については、改めて検討を行う必要がある。

時計をもっていないものね。(折原一「異人たちの館」)

(11) 被害を受けた方が、「いいえ、子供のことだから良いですよ」という言葉なのです。(Yahoo!知恵袋)

(10) の「子供のことだから」は、「時計をもっていない」「遊びに熱中しやすい」という子供の属性に言及している場合で、A①の基準が適用され、考察対象に入れられる例である。一方(11)は、「子供に関する事柄」という意味であり、B④が適用され、考察対象から外される例である。

次の(12)は、B⑤の基準が適用され、考察対象から外される例である。

(12) [何歳ぐらいの男だったかを尋ねられ]

夜中のことですから顔がちゃんとみえたわけでもありません。ただ身のこなしが二十代、いってても三十代そこそこではないか。(木谷恭介「京都山田殺人事件」)

「夜中のことですから」は、「夜中がもつ時間的属性」「夜中の出来事」「夜中という状況」など、「コト」に複数の解釈が可能で曖昧性をもつため、考察対象から外される例となる。

5. コーパスの用例の分析

この節では、コーパスから抽出された「コトダカラ」「コトダシ」の用例について、前接する語の品詞の特徴、主節のモダリティの共起状況、「コト」の介在によって付与される意味などの観点から、その用法の特性の分析・考察を行うことにしたい。

5-1 前接語の品詞の分布

<表4>は、前接語の品詞の特徴に基づき用例の分布状況を整理したものである。

<表4>前接語の品詞別分布状況

	コトダカラ			コトダシ		
	ことだから	ことですから	割合	ことだし	ことですし	割合
名詞ノ	83	20	84%	3	0	5%
動詞	5	5	8%	39	7	77%
形容詞	1	0	1%	8	1	15%
その他	6	2	7%	2	0	3%
小計	95	27	100%	52	8	100%
	122			60		
合計	182					

上の表で明らかなように、「コトダカラ」「コトダシ」の間には、前接する品詞の分布に対照性が観察される。それぞれの特徴を箇条書きにして整理しておく。

「コトダカラ」「コトダシ」の前接語の品詞の分布の特徴

- 1) 「コトダカラ」は名詞に続く割合が極めて高い(用例総数の約84%)のに対し、「コトダシ」はその割合が低い(約5%)

- 2) 「コトダカラ」は動詞に続く割合が低い(約8%)のに対し、「コトダシ」はその割合がかなり高い(約77%)。
- 3) 「コトダカラ」は形容詞にはまれにしか接続しない(122例中1例のみ)のに対し、「コトダシ」では一定の割合で接続する(約15%)。

以下では、「コトダカラ」「コトダシ」の上記の特徴について、例を挙げ説明を加えておこう。

5-2 「コトダカラ」の用例

まず、「コトダカラ」の用法の特徴であるが、前接語には圧倒的な割合で人を表す名詞が使用される点が挙げられる。人以外の名詞としては、動物、国家・機関・施設・地域など、有情物や人間によって構成される場所という意味を持つ名詞が用いられやすい。しかし、これは絶対的な基準ではなく、その属性への言及という解釈が可能な名詞なら用いることが可能である⁶。(13)～(15)は前者の例、(16)は後者の例である。

- (13) いや、猫のことだから、身軽に机の上に飛び乗ったのだろうが、…(赤川次郎「三毛猫ホームズのクリスマス」)
- (14) 狭い島の村のことだから、心にかかる人の画の行方がさゆりに分からぬ筈はない。(阪田寛夫「ノンキが来た」)
- (15) 韓国のホテルのことだから、喫煙に関してはうるさくない。(森巢博「極楽カジノ」)
- (16) 京都と東京に離れて住んでも、本宮部長のいう「くしゃみの届く距離」のことだから、ごく頻繁に往来して、別居の感じを持たないですむと考えていたが、やはり、別居は別居でしかなかった(後略)。(城山三郎「毎日が日曜日」)

動詞に「コトダカラ」が続く例の数は多くはないが、「いる・ある」やテイル形など、状態性の動詞の基本形が用いられ、「状況・現状・事情」といった意味を表す従属節を構成し、主節では状況の特質を考慮した場合に導き出される、妥当な判断やとるべき行動が述べられる。(17)～(19)がそうした例である。(20)は動詞のタ形が用いられた唯一の例である。

- (17) 傍には津村社長もいることだから、いまさら逃げまどうこともなかった。(和久峻三「京都時代祭殺人事件」)
- (18) 両親にせつかく大学で学んでいることだから、その関係の職につきなさいといわれています。(Yahoo!知恵袋)
- (19) ご心配でしょうが、入院なさっていることですから、お医者様にお任せしてご自分の健康維持にお努めくださいね。(Yahoo!知恵袋)
- (20) 「いや、私にも何の事だか分かりませんが、高川さんがせつかく電話をかけて下さったことですから、だまされたつもりでやってみましょう」警部補の声にも、嘲るような、軽蔑するような響きがあった。(高木彬「神津恭介の回想」)

形容詞に「コトダカラ」が続くことはまれで、次の(21)は、対象とした用例の中の唯一の例である。

⁶ 本稿で「コトダカラ」を取り上げるきっかけとなったのは、駆け出しの日本語教師であった頃に担当した中級日本語の授業で、この文型の説明に苦慮した筆者の経験である。その例文は「保存がきかないキャベツのことだから、やむをえずつぶしているのだ、という。」というものである(「第八課 豊作貧乏」対外日本語教育振興会編(1980) *Intensive Course in Japanese: Intermediate Vol.1*)。中級レベルにおける使用文型とは言えないが、理解文型にとどめるにしても、当時(1980年代初頭)はその用法を説明する適切な参考書さえも存在しなかった。

- (21) けだし九州には土著の久しい山村も多いことだから、同じ話は尚色々の変化を以て、阿蘇や山国谷以外にも行われて居るに違いない、…（柳田國男「全集日本野鳥記」）
- 「コトダカラ」が「こんな/そんな/そういうふうな」のような指示語を受ける場合、「状況・事情」という意味を持ちやすい。以下は「その他」の例として考察対象に入れたものである。
- (22) はがきはあるのに何で封筒はないの？こんなことだから郵政民営化しなきゃいけないの！でしょ？（Yahoo!知恵袋）
- (23) だから一兩の価値については諸説あってよくわからないようです。そんなことだから両替商はボロ儲けができたのかもしれませんがね。（Yahoo!知恵袋）
- (24)（前略）私は、まだそこについてどうだという判断を今の段階でするだけの自信はないというのが正直なところでございます。そういうふうなことですから、新しい政策もやっていかなければならない、念には念を入れてと申しますか、そういった感じで私はやっているところでございます。（国会会議録）

5-3 「コトダシ」の用例

考察対象とした「コトダシ」の用例数は「コトダカラ」の約半分であるが、その約77%が動詞に続き、名詞はほとんど用いられない（約5%）。また、「コトダカラ」では動詞のタ形を受ける例は1例しかなかったのに対し、「コトダシ」では、ル形・タ形のどちらもほぼ均等に用いられており、「コトダカラ」とは対照な振る舞いを見せる。形容詞は一定数用いられる（約15%）。以下に動詞、形容詞が用いられた例を挙げておく。

- (25) ま、いざとなったら同行する食いざかりのキクチ青年もいることだし何とかなるだろう。（東海林さだお「のほほん行進曲」）
- (26) 何にせよ、旦那さんに不倫と言う不貞行為があることですし、やはり裁判で争った場合には、旦那さん側が『ものすごく不利』でしょうね。（Yahoo!知恵袋）
- (27) 就職したことだし、80歳あたりのおじいちゃん、おばあちゃんへプレゼントをあげたいと思います。（Yahoo!知恵袋）
- (28) しかし、浅見さんがせっかく来てくれたことだし、一応、あなたの口から直接、話だけでも聞かせてもらおうと思ひましてね…（内田康夫「沃野の伝説」）
- (29) 五年ばかり前、妻と「つきあいも長いことだし、そろそろ婚姻届なるものを出してみようか」なんて話になり、一年ほど法律婚をしたことがあります。（榎原富士子「これからの選択夫婦別姓」）
- (30) なんとか本屋で売れる他の手はないものかと、あれやこれや頭をひねったあげく、年末も近いことだし写真をふんだんに盛りこんだ手帳をつくってみようということになった。（堀内俊宏「おかしな本の奮戦記」）

「名詞ノコトダシ」の例は3例あった。それを以下に挙げておく。

- (31) 「田舎のことだし、きっと普段から、あんまり戸締りとかはきっちりしてなかったと思うんだけど…」（綾辻行人「どんどん橋、落ちた」）
- (32) 背広にしようかと思っていたが、正月のことだし、着物で出かけた。（大豊昇「はっぴい・らいふ」）
- (33) 「（前略）君を祝福するために、何かお祝ひの品物でもあげるところだけれど、何しろ学生

のことだし、皮肉に思はれても困るから、関や有馬も一緒に、一タどこかで心持よく飲まうといふんだよ。」(徳田秋聲「徳田秋聲全集」第39巻)

前田(2006b)が指摘する通り、「コトダシ」は、ほかにも原因・理由となる事態が存在することを暗示する意味をもち、文中に「も」が出現することが多いという特徴をもつ。本稿の用例でも同様の特徴が確認できたが、前田の指摘とは異なる点も観察された。前田の調査では名詞に続く例は見られなかったとされるが、本稿のデータには「名詞ノコトダシ」の形をもつ上記(31)～(33)の3例があった。ほかに「名詞デモアルコトダシ」「動詞タバカリノコトダシ」の形のものが1例ずつあった(この2例は「その他」に分類)。

名詞に「コトダシ」が続く場合の特徴として、「コトダシ」は、特定の人物のもつ固有の属性に言及するような場合には用いられにくく、当該の名詞の有する一般的属性を問題にし、そこから自然に導かれる結論を述べるような場合に使用されるように思われる。

(34) 面倒見のいい山田先生の {ことだから / ? ことだし}、困っている学生を放っておかないだろう。

(35) 田舎の {ことだから / ことだし} 普段から戸締りとかはあまりきちんとしてなかったんじゃないかな。

(34)は「面倒見のいい山田先生」という、特定の人物の属性が述べられている文だが、「コトダシ」の使用は若干不自然に感じられる。一方、(35)では「田舎」のもつ一般的属性が取り上げられており、「コトダカラ」「コトダシ」のどちらの使用も自然に感じられる。「Nノコトダカラ」は「Nについて、その属性を根拠に帰結として推論できる事態を述べる」(益岡近刊)という固定化した用法をもつが、Nの属性への言及という解釈ができれば、特定・総称的のどちらのタイプの名詞も使用可能である。これに対し「Nノコトダシ」は、使用可能な名詞のタイプに制限があり、一般的属性・状況の特性という解釈ができる名詞に使用が限定されているように思われる。

5-1の1)2)で指摘したように、「コトダカラ」と「コトダシ」の前接語には、品詞の上で相補的分布傾向が観察されたが、その理由は、用法が固定化している「Nコトダカラ」の間隙部分を「コトダシ」がカバーしていると考えることによって説明可能ではないかと思われる。

5-4 主節のモダリティの共起状況

「コトダカラ」「コトダシ」と主節のモダリティの共起状況を、コーパスの用例に基づき、確認しておきたい。結論を先取りして述べれば、「コトダカラ」「コトダシ」の主節には、判断、行為要求、表出の表現が使用されるばかりでなく、一回性過去の事実を述べ立てる表現も使用可能である。5-2、5-3で挙げた例を共起する主節のモダリティに基づき整理すれば、以下の通りである。

<表5> 「コトダカラ」「コトダシ」と主節のモダリティの共起状況

	コトダカラ	コトダシ
判断 (断定を含む)	(13) (14) (15) (16) (21) (22) (23) (24)	(25) (26) (31)
働きかけ (依頼・命令・勧誘)	(18) (19)	(29) (33)
表出 (意志・希望)	(20)	(27) (28) (30) (33)
一回性過去の事実の述べ立て	(17)	(32)

「Nノコトダカラ」と共起する主節のモダリティについては、そのほとんどは概言系判断の表現で、行為要求や表出の表現が使用されるケースは一例も見られなかった。一方、動詞に「コトダカラ」が続く場合は、行為要求や表出の表現も共起する。(18) (19) がそうした例である。

次に「コトダシ」と働きかけの表現の共起だが、「～てください」のような典型的な行為要求の表現は見られず、ほとんどの場合、後に続くのは勧誘を表す「～しようか」という表現である。勧誘は意志と連続的であり、表出と働きかけの中間的存在であるが、(29) (33) がここに分類される例である。

一回性過去の事実を述べ立てる表現との共起については、補足的説明が必要である。〈表5〉では、(17) (32) がこのタイプに入れてあるが、(32) を例にとり説明を加えておこう。

(32) 背広にしようかと思っていたが、正月のことだし、着物で出かけた。(大豊昇「はっぴい・らいふ」)

(32) は途中がはしょられており、本来の表現意図を復元すると「正月のことだし、着物にしようと考え、着物で出かけた」のようなものになると考えられる。つまり、ここで「ことだし」がつないでいるのは「着物にしよう」という意志表現の部分であり、「着物で出かけた」という過去の事実を述べている部分ではないといえる。次の(36)も類例で、「ことだし」がつないでいるのは「しかたがない」という判断の部分だと考えるのが適切である。

(36) 一泊分を無料にしてくれるということだし、わざわざ部屋までおわびに来てくれたことだし、卒業式も終わったため、私と母は、しかたがないとその時は納得していた。(さえき あこ「ニューヨーク大学院に留学して」)

以上の点から、(32) や (36) は、一回性過去の事実ではなく、意志・判断と共起している例とするのが適切なケースだと考えられる。だが、こうした解釈が当てはまらない例もある。すでに挙げた(17) (以下に再掲) および、(37) ～ (39) がそうした例である。

(17) 傍には津村社長もいることだから、いまさら逃げまどうこともなかった。(和久峻三「京都時代祭殺人事件」)

(37) しかし執念深い家康のことだから、このことはかなり長い間彼の胸の中に根雪のように残された。(童門冬二「小説近藤勇」)

(38) 派手好みの信長のことだから、このようなお祭りには惜しみなく金を出した。(新田二郎「武田勝頼」)

(39) 明和七年のころ、この田沼と源内との間のもっとも確かなチャンネルとなりえたのは、青木昆陽は前年に歿していることだし、やはり千賀父子以外になかった。(芳賀徹「平賀源内」)

上の(17) ～ (39) は、引用部分のはしりもなく、主節に一回性過去の事実、あるいは過去に下された判断を述べ立てる表現が続いている例と見なすことができる。ただし、いずれも小説、歴史書など、語り物のジャンルのテキストの例であり、日常的な談話の例とは別扱いする必要があるものである。

結論としては、「コトダカラ」「コトダシ」は、日常的な談話の使用では「判断系」のモダリティと共起するのが基本であるが、小説・物語など、語り物のジャンルのテキストでは、一回性過去の事実の述べ立て表現とも共起が可能だといえる。語り物では、なぜこのようなことが可能になるのかという問題は、非常に興味深いテーマであるが、テキストのジャンルや視点の問題など、言語学ばかりでなく、文学研究における物語論なども射程に入れて分析する必要がある。この問題の追究は今後の課題としたい。

5-5 「コト」が付与する意味

最後に、「コトダカラ」「コトダシ」において「コト」によって付け加えられる意味について考えておきたい。

- (40) a 期末試験も終わった {ことだから／ことだし} 今日はみんなで飲みに行こうか。
b 期末試験も終わった {から／し} 今日はみんなで飲みに行こうか。

(40) の例において、「コト」が介在する (40 a) には、状況の特質への言及という意味が読み取れる。すなわち「徹夜続きの日々からの解放」「思う存分遊ぶことができる」など、「期末試験の終了」という事態から想起される状況の属性に言及している表現といえる。一方、「コト」が介在しない (40 b) は、「期末試験の終了」という時間的状況を提示しているにすぎず、そこから想起される状況の特質といった意味は読みとれない。

「コトダカラ」は、人名詞を受け「話し手にとってなじみ深い存在である人物」(益岡近刊)の属性を述べるといったイディオム化した用法をもつ。一方、動詞や形容詞などを「コト」が受ける場合、「コト」は状況のもつ属性・特質という意味を添えるものになる。そして、こうした場合に「コトダカラ」「コトダシ」が担う関係づけは、「状況の特質への考慮に基づき、適切な判断やとるべき行動について述べる」というものになる。単独の「カラ」「シ」と比べた場合、「コトダカラ」「コトダシ」の主節では、単純な事実の述べ立てよりも、判断・働きかけ・表出の表現の使用が自然になる理由は、「コト」の介在により指定される、上記のような関係づけの特化という点から説明できるのではないかと思われる。

6. まとめ

本稿の調査で明らかになった点を箇条書きにしてまとめ、本稿を締めくくりにしたい。

- 1) 「コトダカラ」「コトダシ」は、「状況の特質への考慮に基づき、適切な判断・行動を行う」といった関係づけを表す点で、共通する用法をもつ。
- 2) 「状況の特質」という意味は、「コト」によって付け加えられる。
- 3) 「コトダカラ」は人を表す名詞と強い結びつきをもち、「その属性を根拠に推論できる事態を述べる」という「構文イディオム化」した用法をもつ (益岡近刊)。
- 4) 「コトダシ」は、「コトダカラ」とは対照的に、名詞に続く用法はまれで、ほとんどは動詞・形容詞に続き、既定的な「状況・事情」といった意味をもつ従属節を構成し、「コトダカラ」とは相補的な領域で使用される。
- 5) 共起する主節のモダリティは、どちらの場合も、基本的に「判断系」のものだが、小説・物語など、語り物のジャンルのテキストでは、事実の述べ立てのモダリティも共起可能である。

参考文献

- 市川保子 (2007) 『中級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
笹栗淳子 (1999) 「名詞句のモダリティとしてのコトー『Nのコト』と述語の相関からー」アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育 実用的言語理論の構築を目指して』くろしお出版
日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』くろしお出版
蓮沼昭子 (2009) 「日本語母語話者の『ノダカラ』使用の実態—名大会話コーパスをデータに」『日本語教育連絡会議論文集』21

- (2010) 「自然談話における『モノダカラ』について」『日本語教育連絡会議論文集』22
- 備前 徹 (1989) 「『～ことだ』の名詞述語文に関する一考察」『滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学・教育科学』No.39
- 日高水穂 (2006) 「『のこと』の機能—話しことばにおける新しい格表示—」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平1 形態・叙述内容編』くろしお出版
- 堀池尚明 (1999) 「『シ』を用いた原因・理由表現について」『筑波日本語研究』4
- 前田直子 (2006 a) 「現代日本語における接続助詞『し』の意味・用法—並列と理由の関係を中心に—」『人文』4 (学習院大学人文科学研究所)
- (2006 b) 「原因・理由の暗示的累加を表す従属節—こともあって・ことだし—」藤田保幸・山崎誠編『複合辞研究の現在』和泉書院
- (2009) 『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- (近刊) 「Nノコトダカラ構文の意味分析」『事象タイプの記述研究』くろしお出版

調査資料出典

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ (2009年度版)